

● シリーズ 私の見た日本 Vol.207

杜の都を探して

靳 嘉偉 (ジンジャウェイ)

時の経つのはとても速い。日本語学校の1年間、東北工業大学での4年間を経て、現在は同大学大学院の修士課程1年に在籍し、日本に来てもう6年目になった。

日本に来る前、私の心の中には見知らぬ場所に対する楽しみと不安な気持ちが同居していた。だが私にとって、アジア唯一の先進国である日本の社会およびその変遷について観察する絶好のチャンスであった。日本に来る前は、「日本では同胞に気をつけて、相手が同胞だからといって気を緩めてはいけない」と戒められていた。私自身も、日本に来たからには、もっと日本人の友達を作って、日本語を練習しなければならないと考えていた。そこで、来たばかりの頃は、自発的に周りの日本人の同級生と友達になり、快適な中国人の輪のなかにいないようにしていた。しかしその後、文化的な違いもあり、また自分の日本語はあまり上手ではなかったため、最終的には、周りでよく一緒に遊ぶ友達は中国人が多くなった。私の周りの他の学校の学生たちも大体そうだった。

実際に来日するまでの日本に対するイメージは、日本語教師や教科書の記述からある程

度学んでいた。とくに、子供の頃から見てきた多くのアニメや日本映画の生活描写によって、期待を膨らませていた。だが、実際に18年間暮らした故郷、家族のもとを離れ、全く知らない環境に来て見知らぬ言葉を使うのは、高校を卒業したばかりの自分にとって、やはり恐怖だった。

でも、日本に来る前から、日本人は性質がいいと聞いていた。いま自分も、確かにそのように実感する。まずサービス態度から見ても、お客様は神様、と考え、飲食業界でもビジネスでもその他でも、従業員の態度は非常に良い。笑顔を活かす、できるだけお客様のニーズを満たすように努力する。一日中人の顔色を見て仕事をし、強制的に笑わなければならないのがサービス業の人なのだろうか、と思っていたが、よく観察してみても、従業員の態度はいつもお客様に対して丁寧で、またお客様も、丁寧にサービススタッフに対応している。お客様だけが神様なのではなくて、みんなが相乗効果を前提にしている。日本では、外に出て手続きをするのも楽だ。役所でも図書館でも、みな話やすく穏やかで、できるだけ何とかしてあげようとしてくれる。何

か面倒なことがあっても、すべてのことを自分で引き受けず、他の人を紹介してくれ、次も笑顔で挨拶してくれる。驚いたのは、エスカレーターに乗るときに、みんな秩序正しくルールを守っていることである。急いでいない人は右に立ち、急いでいる人に左側を残しておく。いつも、本当に人のことを考えていることに感心する。

日本語学校では、ベトナム人、イギリス人、インドネシア人、ネパール人など、多くの外国人が留学しており、だんだん慣れてきて一緒に食事をしたり、一緒に遊びに行ったり、一緒におしゃべりをしたりと、仲良くなった。他の国の文化や習慣などをたくさん知ることができ、知識を広げることができた。お互いに交流し、自分の口語のレベルを高めることができ、良い学びの時間を過ごすことができた一年間だった。

その後、東日本大震災を経験し、わずか数年で急速に復興を遂げた仙台に来て、大学に進学することとなった。はじめて来たまち、仙台は、私にとっての日本そのものだ。仙台の第一印象は、思ったほど賑やかではなかった。北京や上海よりも近代的な高層ビルが少



輪王寺庭園の枯山水



田中澤家住宅



輪王寺庭園



登米市街並み



片山邸庭園



片山邸で小山雅久氏の相談



1997年中国山西省太原市に生まれ、2016年10月来日、2018年4月仙台国際日本語学校卒業後、東北工業大学安心安全生活デザイン学科に入学、現在、東北工業大学デザイン専攻の地域共創科学分野に在籍。

なく、上海ほど人が混んでおらず、静謐で、穏やかなものが多い。仙台国際日本語学校も、それほど大きくはない。それで、最初は少しがっかりした。先進的な日本というイメージとは少し差があったからだ。でも、語学学校の生活に溶け込んでいくと、仙台は「スズメは小さいが、五臓がそろっている」という古い言葉に本当に合っていることがわかる。様々な施設。きれいなレストラン。近代的な教室に、きれいなトイレ。豊富なパソコン教室と図書室、そして専門のレジャー公園が、学校の教師と学生に提供されていた。

仙台で特筆すべきは、私が中学校や高校時代に学んだ魯迅先生についての内容だ。魯迅は中国文学史上最も偉大な学者の一人であり、彼の一生の中で、最大の転換点は仙台に留学していた時間である。彼は医従文を放棄し、それによって中国人民の運命を変えたので、魯迅が留学した仙台に対して、私はずっと尊敬の態度を持っていた。仙台に着き、最初は友達と一緒に魯迅像を見学し、次に仙台城跡で仙台全体を見下ろした。自然林と都市の完璧な結合は、私に日本文化に対する新しい認識を持たせたといえる。

仙台を含めた東北地方は、まだ伝統的な住宅形式が残っているようにもみえ、急速に発展している現代社会と伝統的な文化の双方が学べるとも考え、東北工業大学の生活デザイン学科に入学した。異なる文化を学び、未来の文化の融合の可能な方向を探したいと思ったからである。

入学してからの大学の生活は、私にとって、新しい変化をもたらした。この学科には、留学生が私一人しかいないので、最初は授業の4割程度しか聞き取れなかった。多くは、先生が黒板に書いた内容を書き写して、家に

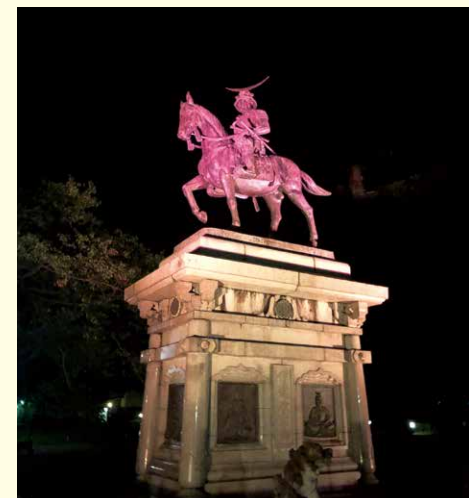
帰ってからそれぞれ翻訳し、先生が出した課題を完成させるしかない。複雑で難しい内容もあったが、とくに「住まいのデザイン実習」などで、手仕事で自由にデザインする内容は、学習の楽しさを感じさせた。

大学3年生の時、仙台の都市構造及び日本文化に興味を持ち、住宅史・住文化を学ぶことを選んだ。指導してくださった小山教授は、細やかなサポートをしてくださり、仙台周辺には歴史的な背景や価値を持っている都市施設、都市景観、建築遺産などが数多くあることを教えてくださった。その際、過去から現在までのつながりのなかで、まちかどのように変容したのかを研究した。仙台の歴史とともに、各産業文化や日本の民俗文化、その表現・継承手法に興味を持つようになった。

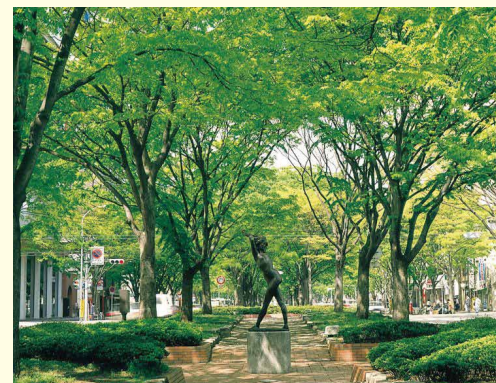
そこで、大学卒業後は大学院に進学し、仙台の近代建築やその保存再生、東北の地域性などを研究している大沼教授のもとで、とくに「日本庭園」に着目して研究を続けることとした。日本の多くの伝統文化のなかでも、長い歴史と近現代の展開をみせる庭園文化は興味深い。先生からは「この分野は学ぶべきことが極めて広く、また深い」とも指摘されたが、東北地方で最も多くの武家地が広がっていた仙台は「杜の都」と称されていた。それは、どのようにいま受け継がれているのか、それとも消失してしまったのか。魯迅先生が来た明治末期と現在の風景もまた違うのだろう。仙台、宮城のまちの変容のなかで、このことを考えるのは意味があると思う。長い風土の持続と変容のなかで、寺院は割合、旧情を遺している面があるともいわれ、仙台地方にも寺院が多く存在していることから、仏教文化の影響を考えたり、石組に着目したりして、庭園の構成の一端を明らかにしてい

くことが、現在の研究の目標である。

それにしても、文化交流は重要だ。私自身、留学した最大の収穫は、文化交流だとおもう。中国で最近活躍している世代では、アメリカ留学者が圧倒的に多く、それ故にアメリカナイズされた思想を持つ。中国を発展させるためには、新しいものを創出するアメリカ型思想と、それを人間的な調和に発展させるよう工夫をする日本型思想が同時に必要となるであろう。後者はとくに、これからの中国の足りない部分である。私はこれからの10年間、自分の日本での文化交流やものづくりの経験を生かし、故郷太原市に貢献できる部分で貢献することを夢としている。たとえそれが微々たるものであろうと。願うところは10年間、太原市が環境に配慮しながら、経済やテクノロジー……あらゆる面で、更に発展を続け、地球村にとってなくてはならない存在となることである。そして周囲の国々の人が集まる、魅力のある都市へと変化するのを、遠くから願っているのである。



上/仙台城跡伊達政宗像 下/2016年魯迅像との写真



定禅寺通り「杜の都」



仙台国際日本語学校